

Socrates, Achilleus, *Aidōs*:

Plato, *Crito* 44a10-44b3

安西眞¹

0

この発表者用のテーブルに私がついて、みなさん、つまり古代ギリシア哲学セミナーの会員がその大半を占めるこの聴衆の前で、「古代哲学」に関して、「哲学」とまったく無関係とは言えないようなお話をするというのをいぶかしく感じておいでの方も少なくないと思う。私は自分自身を「哲学の徒」だとは規定しない。私自身の規定に従えば、ここにおいででの「哲学」の徒の大半がお認めくださるであろうように、古代ギリシア文献学・文学の徒である。従って聴衆が感じるであろう多少のいぶかしさは、やむをえないという覚悟で、これからの話を進めるのだ、ということをお認めくださるようお願いする。

ソクラテースが獄死した年齢である 70 歳に発表者が達しかかる頃、現在、京王線府中駅付近で友人と共同で運営している古典語教室で、生徒さんたちと『クリトーン』を読んだ。そして、ぜひこの作品の、我々文献学者たちの業界で言うところの注釈書（full 装備の）を書きたいと思うようになった。ここでは、その来るべき注釈書の解題（Introduction）に該当することのうち『クリトーン』がどのような種類の創作物・文学作品であるか、あるいは当該注釈者が考えているかという、おそらく解題の中心になるべき事柄を比較的自由的な形でお話ししたい。ソクラテースが、クリトーンの懇願に譲って獄から出るのではなく、獄で死刑の執行を待つ他ないという決心を固めた（とうに固めていた）事情を語るこの作品をどのようにプラトーンは説得的に構成したかを、僕なりにどのように受け入れ理解するのか、その核心に関してお話ししたい。

注釈書の進行度についての正直な報告をここで書き加えておきたい。ひとのからだは年齢には逆らえないように出来ているらしく、作業は遅々として進まず、現在（2019年9月中旬）、最低限の完成へと向けて、1/3 か、1/4 の地点に達したところと言うのが正確で

¹ 最後の章で言及される『イーリアス』における、サルペードーンによる、僚友グラウコスへ向けて発した演説（*Il.* 12. 310-28）、ヘクトールがトロイエー城内で、妻のアンドロマケの「危地に出るな」嘆願に対してなした拒絶演説（*Il.* 12. 310-28）、アキレウスが、母テティスの「陣を出ればヘクトールをたおせても彼の人の後を追ってお前も死ぬ定めだ」というさとしに対して、怒りとともに発せられた、速やかな戦死を覚悟しての出陣宣言演説（*Il.* 18. 98-126）、以上のギリシア古代叙事詩における三大アイトース演説と論者が名付ける演説は、口頭発表の際には、本文と論者個人の訳を資料として配布したが、紙数をとりすぎる等の点を考慮の上、本論文には資料として付加しないことにした。本稿を読んでくださる方には、ご面倒でも簡単に入手できる邦訳のどれかなどをお手元にご準備くださるようお願いしたい。

あろう。注釈の完成の日よりも「明後日」に迫った「死刑」の刻限のほうが近いのではないか、という恐怖が発表者を支配している。

1

まず、第一にこの作品の「歴史的な意味での事実再現度」について感じていることを語りたい。状況証拠からすれば、この作品と同じく「歴史的な意味での再現度」について、歴史家・哲学者の双方から『クリトーン』同様に疑われている——それは、ある歴史性を彼らから同時に認められてもいるという意味も持つ——『弁明』と比べた場合、常識的には『クリトーン』の「創作度」は高いと見るのが妥当だろう、と私は考えている。『弁明』は、陪審員を中心に多数の目撃・聴衆者のあった、自分自身を被告とする「歴史的人物」であるソクラテースによる弁護演説である、という体裁をあくまでも採っている。しかも、『弁明』が文字化され、流布され始めた当時では、明らかによくギリシア世界に知られていたに違いない、被告の弁護演説そのものを実況的に再現した作品（無罪を主張する本体 17a-35d、量刑をめぐる提案 35e-38b、死刑結審後の付加部分 38c-42a）という形をとっている。陪審員を中心とする多数の目撃・聴衆者の多くは、この作品が読み得る形を取った時、まだ生存していたと、常識的には信じられる。一方、『クリトーン』は死刑の2日前、獄中で、2人の間でだけ、しかも少なくとも冒頭のかかなりの部分はお互いの顔も認識できない暗い光の中で交わされた対話の形を取っている。クリトーンはソクラテースの同輩、作品完成時に生存していた可能性は高いとはとうてい言えない。精確な再現である必然性はそう高くはない。これもまた常識的な判断と言えるだろう。

2

次に、後半部（46b-54e）、いわゆる「社会契約説」²の部分にも簡単に触れておきたいと思う。普通の意味では、ソクラテースが脱獄・亡命ではなく、死刑執行を選んだ根拠の大部分はここに語られていると判断すべきである。いわば、『弁明』に、裁判での陪審員の前での陳述という形式の故に真実の表明（特に哲学の同輩へ向けた部分という意味でのそれ）として足らざる部分があるとすれば、その不足の大部分をこの後半部が補っているとも言えると、考えるべきである。クリトーンの勧めを受け入れた上で、獄を出よう

² 口頭発表では、「社会契約論」という語を使った。中畑正志氏から発表後、私的な場で、この用語の方が適切なのではないか、という言葉がかけられた。論と説の決定的な違いはどこかという問題は別として、日本の知識人社会では「社会契約説」のほうが明らかに正当な用語として通用しているようであるから、本稿では有難くご指摘を受け容れることとする。

とするソクラテースという人物を架空の対論の一方の語り手として創出し、もう一方にアテナイ法の精髓（οἱ νόμοι）を擬人化した架空の語り手³を創出した上で、この2人の仮想の語り手の間に交わされた、形式上極めてユニークな（いっそ演劇台本と言ってもいいような）対話の部分である。クリトーン注釈書の解題としてなら、当然もっと詳しく語らなければならないところであるが、議論したいことが別にある、というこの話の都合もあり、この「社会契約説」の部分に向けての指摘は、一点だけにとどめたいと思う。その一点も、後でお話するように、プラトーン理解上で経験した私の個人的な事情に関わることであると言えるのだが。

この短い対話編の中に三度も τὸ σὸν μέρος という表現が使われている。いずれも『架空の』対話に関連して見られる。ひとつは、クリトーンが、ソクラテースが行なおうとしていることを批判して言う言葉の一部として使われている⁴。もしもソクラテースが、クリトーンの懇願を容れず、子供たちを残して獄で死刑を待つ、ということになれば、こういうことが起きることになるとクリトーンは言う：(A) καὶ τοὺς ὑεῖς τοὺς σαυτοῦ ἔμοιγε δοκεῖς προδιδόναι, οὓς σοι ἐξὸν καὶ ἐκθρέψαι καὶ ἐκπαιδεῦσαι οἰχῆσθαι καταλιπὼν, καὶ, τὸ σὸν μέρος, ὅ τι ἂν τύχῃσιν, τοῦτο πράξουσιν。[君自身の息子さんたちをも、捨て去ろうとしているように私には思える。君にはかれらを成人させ、彼らに教育を完遂させることができるのに、置き去りにしようとしているからだ。そして、その結果として、息子さんたちは、君に関わる部分だけを言うならば、何であれ、行き当たりばったりのものを手に入れ（ὅ τι ἂν τύχῃσιν）、それを自分の境涯として得ることになるだろう（τοῦτο πράξουσιν）45c9-d2]。ちょっと難しいギリシア語であるが、この表現の理解については後でまた、一部は検討したい。残りの2例は、作品後半の、架空の社会契約説的対論そのものの一方の語り手である νόμοι が、ソクラテースに対して、もしもクリトーンの懇願を受け入れて脱獄、あるいは亡命することになれば、こういうことになるぞ、と脅して言っている言葉の中に見つかる：(B) ἄλλο τι ἢ τοῦτω τῷ ἔργῳ ᾧ ἐπιχειρεῖς διανοῆ τοὺς τε νόμους ἡμᾶς ἀπολέσαι καὶ σύμπασαν τὴν πόλιν τὸ σὸν μέρος; [君が行なおうとしている所行によって、我々 νόμοι と、ポリス全体を君に関わる部分に関して破壊してしまおうと目論んでいることになるしかないのではないか。50a9-b2]；(C) ἡμεῖς τέ σοι χαλεπανοῦμεν ζῶντι, καὶ ἐκεῖ οἱ ἡμέτεροι ἀδελφοὶ οἱ ἐν Ἄιδου νόμοι οὐκ εὐμενῶς σε ὑποδέχονται, εἰδότες ὅτι καὶ ἡμᾶς ἐπεχείρησας ἀπολέσαι τὸ σὸν μέρος。[君が生きている限りの時間においては、私たちがお前に対して怒りを抱きつつけるだろうし、お前がハーデースに行けば、私たちの兄弟である、ハーデースの法が、君に関わる部分に関して私たち（この世の法）のことを破壊しようとしたことを知っている以上、気持ちよくお前を受け入れるようなことはないだろう。54c5-d1]

³ 実際には、クリトーンによる脱出説得を封殺するソクラテースの「真意」を託された登場人物である、と論者は考えている。

⁴ このクリトーンによる脱出説得へのソクラテースからの批判が形式・内容上、後半の架空の対話に直結している。

これらの *τὸ σὸν μέρος* は、「君に、すなわちソクラテースに関わる部分に関して」を意味し、いずれも、これが副詞として機能している文の中で、その文が叙述していることがあてはまる範囲を限定する対格である。統語論上の用語では *Accusative of Respect* (Smyth §1600-1)、あるいは *Accusative of Specification* と呼ばれている。そして 50a9-b2 中の *καὶ σύμπασαν τὴν πόλιν τὸ σὸν μέρος* という語法が典型的に示しているように、人に対して (*σύμπασαν τὴν πόλιν*⁵) 何かの加害行為が、もう少し広く言えば、述語動詞の作用行為 (*affection*) が行なわれる場合の作用が加えられる具体的部位 (*τὸ σὸν μέρος*) = 「君が責任を持つ部分に関して」加害ないしは作用の結果が生じることを表現している (Smyth §1601a)。ὅτι ἂν τύχῃσι, τοῦτο πράξουσιν は、能動態で表現されており、こういった統語分析が適当ではないようにも見える。しかし当該の文脈の中では、ソクラテースの加害行為ないしは作用の結果を受けるという実質を、あくまでも表面上の統語構造に関して能動態で表したものであるに過ぎず、そのことは、ソクラテースの息子たちが蒙るであろうことを、もう少し分かり易く、直裁な形でクリトーンが言い直したと見られる表現から分かる：*τεύξονται δέ, ὡς τὸ εἰκός, τοιούτων οἵαπερ εἴωθεν γίνεσθαι ἐν ταῖς ὀρφανίαις περὶ τοὺς ὀρφανούς*。[つまり、ありそうな形にしたがうならば孤児たちに孤児状態で起ると通常考えられていること 45d2-4]

クリトーンの言う *τὸ σὸν μέρος* の具体的内容は、息子たちをひとの親として、養育・教育すべき、人間としての義務ということであることは、確かにクリトーンの言葉使いにややまわりくどいところはあることは認めるとしても、明らかであろう。これに対して、*νόμοι* との対話の中での 2 回の使用においては、ポリス・アテーナイを成立させている、市民とポリス・アテーナイとの間の、個々の双務契約の積み重ねのうち、ソクラテースとポリス・アテーナイとの間の一通の契約書を指してまずは *τὸ σὸν μέρος* は言われており、さらには、その成立したソクラテースとポリス・アテーナイとの間の契約の故にソクラテースの側に生じた履行義務を指している、と云うるのである。

(A) についてはちょっと読み取りにくいと思われる点は確かにある。別な意味で、2 番目と 3 番目の用法に関しても、そう言えるように思える。アテーナイの *νόμοι* に関して言えば、アテーナイの *νόμοι* が、市民との契約の上に有効に成立する為には、有効な契約が、この架空の対話が成立した当時、少なくとも数万の規模で必要だったと考えられる。そのうちのひとつが、アテーナイの *νόμοι* とソクラテースとの関係の限りにおいて、ソクラテースの行動如何によって、致命的な危機に陥る恐れがあるのだと *νόμοι* が指摘しているのだ、と仮に認めることができるとしても、ほんとうに *τούς τε νόμους ἡμᾶς ἀπολέσαι καὶ σύμπασαν τὴν πόλιν τὸ σὸν μέρος* という表現が成立し得るだろうか、という疑問は残る。仮にこれが部分に関する表現だと認めた場合でも、*ἡμᾶς ... ἀπολέσαι* [我々アテーナイの法を壊してしまう] という表現を有効な表現であると認めることに我々は

⁵ 直訳は「ポリスの総体」であろうが、集合名詞的に「ポリスのすべての構成員」も意味するので、「ひと」とした。

躊躇しないでいられるだろうか？ あまりにも馬鹿げた比率ではないのか？ それがもしかすると、この表現が意味するところのことが我々にやや分かりにくかった真の理由であったように思える。少なくともこの稿の論者に関してはそうであった⁶。

ソクラテース当人にとっては、もし仮に当時のポリス・アテーナイを支えた契約が 5 万通存在したとして、ソクラテース自身に関わる契約以外の 49,999 通の契約のことなどどうでもよかった、と言うべきだろうか。恐らくはそう言うべきではないだろう。ルソーの社会契約説のように、国家と市民との間に結ばれる契約によって国家は成立しているから、本来国家主権はどのような性質のものであるか、などという分析は、彼（ソクラテース？ プラトーン？）が成立させた、クリトーンの懇願に乗ろうとする架空のソクラテースと、アテーナイの νόμοι との間の架空の議論の、まったく興味の外にあったと言うより、架空のソクラテース個人としてできることの範囲は厳密にソクラテース個人とポリス・アテーナイとの間に成立した一通に関してのみだということを、ソクラテースないしはプラトーンは、十分承知していた、と言うべきであろう。こう考えることによって初めて、この短い対話編の中に三度も使われている τὸ σὸν μέρος という表現を統語論的にまっとうに理解することができるのだと、私には思える。最後に τὸ σὸν μέρος に関する以上の考察にひとつ付け加えておきたいことがある。

お分かりのように、τὸ σὸν μέρος に託されたソクラテースの義務とされる事柄には、2 種あり、外形上では、クリトーンが言う τὸ σὸν μέρος と νόμοι が主張する τὸ σὸν μέρος に分かれる。そして、クリトーンが言う τὸ σὸν μέρος は、古い社会 (clan-society) の構成原理（つまりは、家系図に集約されるような血の原理に依拠した人間集団の構成法）に則ったものであり（親が子に対して果たすべき義務、友を思いやる義務等）、その一方で νόμοι が主張する τὸ σὸν μέρος は、ポリス社会の構成原理に則ったものである。「子の養育・教育義務のことを考えろ」という説得を中心にした、ソクラテースの脱獄・亡命に向けてのクリトーンの長い最終説得 (45a6-46a8) の後に、その熱意に対する感謝と、同時にクリトーンの説得に対する厳しい批判の言葉が、ソクラテースの口に乗る (46b1-2) :

⁶ 論者は、大学の教師を務めたことがあって、その大学に 30 年以上前に赴任した。文学部の古典学担当教師として教室や研究室に通い出してすぐに、文学部の先輩同僚が僕の研究室を尋ねて来て、今議論した τὸ σὸν μέρος が、ギリシア語表現としてどういうことなのかを質問した。情けないことに返答は「まったく分かりません」であった。それから一度もその先輩とこの理解をめぐる話題にしたことはない。忘れていたわけではなくて、実際答えが見つからないので、話題にしようがなかっただけである。上に述べた説明に思い至ったのは、この発表を引き受けて、この原稿にとりかかった後のことである。自分自身の評価を言うと、恐らくここで述べる説明でそう外れてはいないだろうと考えている。この発表にお誘いくださった方々は、実は私にギリシア語文献の易しくはない箇所を読み方についてひとつの確信に見える道にたどり着く力を与えてくださったことになる。

ὦ φίλε Κρίτων, ἡ προθυμία σου πολλοῦ ἀξία, εἰ μετὰ τινος ὀρθότητος εἶη. [親愛なるクリトーン、君の熱心さには大いなる価値が備わることになるだろうよ。もしなんらかの正しさを具えて言われたものでありさえすればね。]

εἰ μετὰ τινος ὀρθότητος εἶηとは何を意味するか? 「父親としての責任がソクラテースにもあるだろう」という趣旨の主張の上に、脱獄・亡命へと向けた、クリトーンの説得があり、その説得は正しい説得の道具を選んでなされたものではない、というソクラテースからの批判を言うまでもなく意味する。もちろんその意味は、ソクラテースが直面している、あるいはソクラテース裁判をつうじてソクラテースが直面し続けてきた問題の種類が、父親と子、友と友のあるべき密接な関係、というような価値語を中心に据えたような説得には手に負えないものであるとソクラテース自身が認識している、あるいは、その種の厳然たる真実を、クリトーンの説得は見落としている、とソクラテースが見抜いているというということを意味する。つまり、この正当さを欠いたクリトーンの説得をソクラテースが批判し、否定することをつうじて、上に引用したクリトーンの説得へのソクラテースの批判の言葉は、『クリトーン』という作品の構成上の役割から言えば、ソクラテースをしてクリトーンを正しい説得をつうじた正しい選択へと導く、あるいは導く努力をする方法へと導く役割を果たしていると読むことができる。どのような経路を通じたかは分からないが、ソクラテースは、自分自身の評価に従う限り、正しいと思われる決断に、もちろんこの時点で達しているのだが、その思考過程そのものを形象化したものに他ならない作品後半の対話場面の発想と形式へと導びく役割を、この批判が担っているという可能的事実に⁷、ここに集められた聴衆の注目を私は向けた。この対話編の書き手は、繰り返される τὸ σὸν μέρος という連語を極めて巧妙に議論の組み立て、作品としての全体の構想の為に使っているという可能性にだけはこの時点でこの稿の筆者は言及しておきたい。

3

さて、本題である夢の場面にかかりたい。この夢の場面が、τὸ σὸν μέρος と実は深い関係にあることが分かってもらえると思う。まず、当のテキストの提示から始めたい。

⁷ プラトーン対話篇に登場するソクラテースが古典期アテナイで猖獗を極めた弁論術に対して極めて深刻な批判を持っていたことはよく知られている。つまりは虚偽に基づく言葉を構築して、政治的なあるいはその他の『おべっか』的目標を達成しようとする『術』として弁論術は理解されるという批判である。この対話篇『クリトーン』は、そのような批判をソクラテースに諸対話篇において語らせ続けたプラトーンが、深い意味での真実に基づく言葉を構築して真の弁論目標（ソクラテースという社会的存在の意義の解明）を達成する『術』を実践してみせた作品と読むことも出来るのではないかと私は評価している。

スーニオン岬にデーロスからの帰りの船が停泊中と知ったクリトーンが、死刑の執行は明日に迫っていると考え、今この瞬間に脱獄・亡命に同意せよ、と迫る。明日ではなく明後日が、その船がアテーナイに着く日だ、とソークラテースは答える。その証拠は何かと迫るクリトーンに、ソークラテースは、奇妙にも、つい先ほど見た夢のことを語る (τινος ἐνυπνίου ὃ ἐώρακα ὀλίγον πρότερον ταύτης τῆς νυκτός 44a6-7) :

ἐδόκει τίς μοι γυνή προσελθοῦσα, καλή καὶ εὐειδής, λευκὰ ἱμάτια ἔχουσα, καλέσαι με καὶ εἰπεῖν·
“ὦ Σώκρατες,

ἤματι κεν τριτάτῳ Φθίην ἐρίβωλον ἴκοιο.”⁸

[ある（それとは特定できない）女性が、美しい女性なんだが、（夢の中に）現れてぼくに近づいてきた、白い衣を身に纏ってね。それでぼくに呼びかけ、こう言ったんだ。

「おお、ソークラテースよ、汝は 3 日目に（つまり明後日）、土の肥えたプティエーエーの地に着くだろう。」と]

まず最初に、この女性が誰であるのか、本稿筆者の推定を述べる。以下、その推定が正しいのではないかと私が思っている理由を述べる、そういう形で論を進めていきたいと思う。

Adam はこの女性を ἡ εἰμαρμένη (Latin 語で *fatum*、神が定めた運命) かもしれない (probably) と推定している⁹。確かに翌々日死ぬ、ということを夢で彼に伝えたのだから、運命という女神なら、その予告はできるだろう。しかし、その女性が美しかったということが Adam の推定の難点である。ひとは、例外もあるかもしれないが、自分が死なねばならない、と決意する時、その死ぬべきさだめそのもの、あるいはその定めを伝える者を、普通は「美しい」とは言わない。私は、ソークラテースが「白い衣」を身に纏って彼の夢の中に現れ、予言をしたのはアイドース (廉恥心) ではないか、と考えている。なんと言っても、ホメーロス (我々の持つホメーロス詩の最後の創造者という意味での) とほぼ同時代の詩人ヘーシオドスが、美しかった人間の社会 (すなわち英雄時代と彼が呼ぶ社会)

⁸ 引用文の字下げは、新しい OCT 版 (*Platonis Opera I*, ed. E. A. Duke et. al. Oxford 1995) に従ってそうしている (Burnet 版はそうしていない)。字下げは、この行が *Il.* 9. 363 を、文脈に合わせて (*ἴκοιην > ἴκοιο*)、引用したものであることを示している。この本文印刷上の処置が正しいかどうか、決定的なことは私には言えない。ソークラテースの言葉を引用と見るか、「もじり」と見るかは、評価の分かれるだろうところだからである。ただ、この論文にとっては好都合な処置とは言えよう。『白い衣を身に纏った』女性の特定に関して言えば、この『クリトーン』内のこの 1 行が口承叙事詩圏の中の 1 行の引用ないしは「もじり」から出来ていることを明示しており、私の推定する『白い衣を身に纏った』女性はすなわちアイドースであるとの同定は、『イーリアス』引用ないしは「もじり」を使った女性への言及を同じく叙事詩圏のヘーシオドスの詩行へと結びつけようとする試みであることを保証してくれるからである。Adam の『白い衣を身に纏った』女性 = *εἰμαρμένη* には、そういう保証はない。そもそも *εἰμαρμένη* は英雄叙事詩の行構造には組み込めない名である。

⁹ J. Adam, *Platonis Crito, edited with introduction, notes and Glossary* (Cambridge 1903). その他の注釈者たちの多くは、この女性を特定することを必要なことだと考えてはいないようだ。

の支柱的価値語としてのアイドースが、美しかった人間の社会の終わりを告げるべく、天上世界へと向けて、人間の大地を去る、と歌っているが、そのアイドースが纏っていたのが、「白い衣」であった：

καὶ τότε δὴ πρὸς Ὀλυμπον ἀπὸ χθονὸς εὐρυοδείης

λευκοῖσιν φάρεσσι καλυψαμένα χροά καλόν

ἀθανάτων μετὰ φύλον ἴτον προλιπόντ' ἀνθρώπους

Αἰδῶς καὶ Νέμεσις·

〔(社会が劣化しきった)まさにその時にこそ、オリュンポス目指して、広い道を持つ大地を、美しい肌を、白い衣で覆って、不死の神々の族へと、人間たちを捨てて、去って行く、アイドースとネメシスが。〕

Hes. *Op.* 197-200

ここで、いくらかの説明が必要であろう。ヘーシオドスは、アイドースとネメシスを、別々の女性（あるいは別々の女性として擬人化された抽象概念）として描いている。『クリトーン』では、「ひとりの女性である (τις γυνή)」。そしてそれはアイドースであってネメシスではないと私は確信している。

「ここ (Hes. *Op.* 197-200) でアイドースとネメシスは、ひと組の、つまり2体の女性神として扱われているが、ひとがしてはならないことをしないようにと、その行為者の内側から引き止めるものがアイドースであり、仲間や、仲間・社会の認める神々による、批判の目や言葉のように、行為者の外側から引き止める力がネメシスである。どちらの神も、美しかった時代（英雄時代）を美しくしてきた神々ではあるけれども、この対話篇にとって重要な神が、ネメシスではなくアイドースであることは、これから我々が知ることである。」この白い衣を纏った女性がアイドースということをも主張する、来るべき注釈書の安西自身による注釈文言を引いた。よく言われるように、アイドースとネメシスはコインの表と裏、と言ってもよい。

「白い衣を纏った女性」が、英雄叙事詩中に、他にも登場しそうだ、と、漠然と考えるひとがいるかも知れないが、白い衣を纏った美しい (*χροά καλόν*) 女性が登場するのは、叙事詩中、引用したヘーシオドスの「五時代説話」のフィナーレだけである、という事実は指摘しておいてしかるべきだろう。

「白い衣を身に纏った」美しい女性がアイドースであることをさらに説得的に語る作業を続ける前に、この作品の導入部分において、この、クリトーンが「奇妙な」と評した (*ὡς ἄτοπον τὸ ἐνύπνιον, ὦ Σώκρατες* 44b4) 夢の話が、構成上、作品の導入部の大きな焦点として扱われていることを示しておきたい。クリトーンは、自分の得た情報が示す予測的事態（死刑執行は明日！）を得て家にじっとしていることが出来ずに、夜の明けるはるか前に、獄舎にソークラテースを訪ねる。しかし、自分の焦燥とは裏腹に健やかに眠って

いるソクラテースを発見し、「感嘆した」と(*πάσαι θανμάζω* 43b5) 語る。だが、もう健やかにこの世で甘い眠りを眠れるのも、ソクラテースには、この目の前でソクラテースが現に眠っている眠りを勘定に入れても、2 眠りしかない、と考えているクリトーンは、ソクラテースの健やかな眠りを妨げるのは、起こされたら不快な「寝ぼけ」気分が残されるだけで、自分だって、それはいやだろうと考え、「叩き起こし」を自粛する¹⁰。目覚めたソクラテースとクリトーンの間で、ソクラテースの健やかな眠りと、死刑実施の日取りに話題がおよび、引用した夢の話になるが、その前に、夢を見たその眠りが、まさにクリトーンが「叩き起こし」を自粛して、静かにソクラテースの目覚めを待っていたまさにその時間に生じた夢見であることが明らかにされる。そして、ソクラテースはその奇妙な符合に関して、*καὶ κινδυνεύεις ἐν καιρῷ τιμὴ οὐκ ἐγείραί με*¹¹ [だから、君がぼくを起こそうとしなかったのは、なにか、神機に合致していたのかもしれないね] (44a7-8) と感想を述べる。しかし、その重要な (少なくともプラトーンとその読み手にとっては) 夢の、いわば守護者だったにもかかわらず、クリトーンは、夢の意味をまったく解せず、また興味ももたず、重要性も認めず、目覚めたソクラテースに、待ってましたと、脱獄・亡命を懇願し始める。かなりアイロニカルな構成にはなっている。極めてアイロニカルな構成ではあるが、しかし、作品の導入部がこの夢を巡って組み立てられているということは、この説明によってもあきらかだと言えるだろう。

「おお、ソクラテースよ、汝は 3 日目に、土の肥えたプティエーの地 (アキレウスの故地) に着くだろう。」という *II. 9. 363* をほぼ一字一句そのままに語る、夢の中の美しい女性の真意は、精確には不明であるが¹²、多かれ少なかれ、自分の愛した人物、あるいは自分の愛する生き方を体現した人物の生まれ育った場所に自分も行くのだ、という響きがそこに含まれていることは、どのような思考の回路をたどっても否定できないだろう。なぜ、アキレウスの生まれ育った場所に、死してソクラテースは行く、という

¹⁰ *Crito* 43b3-6 の解釈については、『「友愛」が発すべき言葉—Platonis *Crito* 43b3-6—』『フィロロギカ—古典文献学のために』XII, 2017, 1-14 を参照せよ。要点だけを記す。ここでは、ソクラテースの不眠を *ἀγρυπνία* に読もうとするのは、明らかに文脈の示す事実と反していること。むしろ、クリトーンがソクラテースに呼びかけ目を覚まさせようとするのは、「甘美な眠り」をソクラテースから奪い取ることになる (*ἀγρυπνία καὶ λύπη*) ので、そのような事態は自分も嬉しくないだろうと、自粛したことがクリトーンの口から語られている。以上である。

¹¹ この部分は *καὶ κινδυνεύεις σ' ἐν καιρῷ τιμὴ οὐκ ἐγείραί με* と非人称文に書き直して印字すべきではないかと私は考えている。*ἐγείραί* という aor. inf. が明きらかに時制的な意味を伴って使われていること。また、その不定詞の否定が *μή* ではなくて *οὐ* によって行なわれているという事実を考え合わせれば、書き換えは必至ではないかと考えている。

¹² 多分、ソクラテースが刑死後、かれの羨望の (死後) 居住地である、アイドースの主宰するアキレウスの故地に、『戻ってくる』、を含意していると思われる。「引用」元である『イーリアス』では、「引用」元詩行の語り手はテティスであるが、海底にいつもは暮らしている女神として描かれる彼女は、刑死後のソクラテースを迎え入れるプティエーの主宰者としては不適切であるし、テティスが「白い衣を身に纏った」美しい女性と歌われたことは、現存叙事詩圏作品のどこにも見えない。また、評者たちの中の誰かが、この女性をテティスだと解説したとは聞かない。

予言を夢に見たのか？

その答えは、*Ap.* 28b9 に始まるトロイエーに死んだ英雄たちへの、就中アキレウスへの賞賛的言及および、*Il.* 18. 98-126 のアキレウス発言（母テティスを聞き手とする）への引用的言及に見つかると思う。このアキレウスによる発言は、『イーリアス』に見られる三大アイドース演説であると論者が勝手に名付けるもののうち最も深いアイドースが見える発言である。別紙資料にその 3 つのアイドース発言の全文と、日本語訳を載せておく。ここでは、それらに対する簡単な解説と、何故に *Il.* 18. 98-126 のアキレウス演説が、最深のアイドース発言であると発表者が評価しているのかについてコメントだけをおきたい。

アイドースが、ネメシス同様、人間が何かの行為を為そうとする時、その行為が何らかの行為をすることを意味している場合でも、不作為を意味している場合でも、その作らないしは不作為の形をした行為の実行を、実行者の内なる声が引き止める場合、これをアイドースと言い、その引き止める力が、実行者の外に存するものたちの批判・非難によって生じる時、その力を生む影響力をネメシスと呼ぶ、と先に説明したが、サルペードーンの発言は、実体としては極めてネメシス発言に近い。サルペードーンの発言において、僚友グラウコスに戦闘を回避することなく今すぐ突撃を行なうことが呼びかけられているが、リュキエーの兵士たちから、戦場を回避せず、立派に戦った場合、318-321 に見られる納得発言（「俺たちの王はやはり立派な英雄であったのだ」）が発せられるであろうと説いている。しかし、それほど無理をせずに眺めていても、この、あくまで立派に戦えば、という条件を充足した上で生じるに違いない納得した兵士たちの口に上るであろう賛嘆のちょうど裏側には、サルペードーンとグラウコスがしかるべく働かなかった場合に生じるであろうネメシス的批判がどんな形をしているかが簡単に透けて見えるようにこの演説は出来ている。こういうことが見え易いからこそ、サルペードーンの演説は、勇ましく聞こえてもやや屈折した響きも聞こえてくる発言になっている、と私がコメントしたら、サルペードーンに対して不公平すぎるだろうか？

妻であるアンドロマケーの、「死なないところで戦ってほしい」という、戦場に愛する人を送り出す女性によって、人類史上、無限回繰り返された懇願を拒絶するヘクトールの発言には、その冒頭にアイドース (*αἰδώς*) からの名詞派生動詞 *αἰδέομαι* が含まれていることを考えれば (*ἀλλὰ μάλ' αἰνῶς αἰδέομαι Τρώας καὶ Τρωάδας ἐλκεσιπέπλου*)、資料に載せられた第 6 巻でのヘクトールのアンドロマケーに向けた発言は、アイドース発言であると、とりあえず言うことができるだろう。しかし、彼が発言しているのが、戦場ではなくトロイエー城の城門の内側であることを考慮に入れれば、ネメシス的批判があるリアリティーを持っている環境内でのアイドース発言だとすべきだと思う。トロイエーびとの家並が見え、城内に残されているトロイエーの婦人たちや老人たちや子供たちが見えていたに違いない場所での発言なのだから。

アキレウスによる母への応答には、ネメシスは存在することができない。自分が英雄としての責務を果たすことができない時、すなわちテントに籠ってただ戦の日々を眺めて過ごしていた間に、死んでしまった、パトロクロスをはじめとするプティエーからの同僚兵士たちは、もう、普通の意味でのネメシ斯的言葉を口から吐くことが出来ない死者となった者たちなのだから。もっとも、亡霊の形を取って、「泣き言」や「お願い」を発することはできるだろう。しかし、アイドースやネメシスが、D. Cairns が言うように¹³、生者が営む社会の「セメント」として機能する何かしらの、という定義が正しければ、死者に本来の意味での、ネメシ斯的影響を及ぼす力は備わってはいない。また、生者も、死者に対して、本来の意味でのアイドースを感じることはできない。

アキレウスのアイドース演説の *ἄχθος ἀρούρης* [大地の荷やっかい *Il.* 18. 104] という句が『イーリアス』18 巻におけるアキレウスの発言の原文のまま *Ap.* で繰り返されている (28d3)。自分自身を厳しく批判するこの表現は形態上、典型的な *Verse-end Formula* の形と位置¹⁴を占めているが、そもそも用例が多くないので *Formula* 性に関する決定的なことは言えない。ただ、叙事詩圏作品全体の中での、もうひとつ見られる用例 (*Od.* 20. 389) が、社会的階層の外にある人間 (乞食、奴隷) を表現する名詞に付された同格的表現として使われていることを考える必要がある。つまり、乞食、奴隷への *Epithet* 的な名詞句として、*ἄχθος ἀρούρης* は、そこでは使われているのだ。我々の常識的想像に照らしても、「英雄社会」が基本的にはポリス社会が形成され始まる以前の部族社会であったとすれば、そういった社会的階層の外にある人間 (乞食、奴隷) をこの部族社会の人間たちは「大地の荷やっかい」とする常識を共有できたはずだと考えるのが通常であろう。つまり、*Od.* 20. 389 における *ἄχθος ἀρούρης* の用法のほうが口承詩人と口承詩の聴衆との間で共有されていたに違いない「英雄社会」の常識的な言語表現であった可能性は高く、英雄社会の常識的・日常的な用法と高い親和性があるということだ。こちらの用法の方が口承叙事詩での日常的・常識的な言語表現としてより相応しい働きをしている。そう考えれば、アキレウスが自分自身に向けて使った我々の用例の方が¹⁵、*Verse-end Formula* の例外的なものであり、つまり *Formula* を転用して何か詩的かつ個別文脈的な、つまりは一回限りの用法である確率が高い。アキレウスが自分自身を社会的な被差別者と決めつける理由はここでは考えにくいから、この表現「=大地の厄介者」は、アキレウスの中の批評者が、アキレウ

¹³ D. Cairns, *Aidōs: the Psychology and Ethics of Honour and Shame in Ancient Greek Literature* (Oxford, 1993).

¹⁴ *Bucolic Diaeresis* と行末の間の部分を占める定型句で、音節記号表記すれば、- U U - - となる。M. Parry, *The Making of Homeric Verse*, 1971, 39 に載せられた表を参照せよ。

¹⁵ 通常の意味でのホメーロス叙事詩におけるもうひとつの用例は、*Od.* 20. 378-9 (*σίτου καὶ οἴνου κεκρημένον, οὐδέ τι ἔργων // ἔμπαιον οὐδὲ βίης, ἀλλ' αὐτῶς ἄχθος ἀρούρης*) に見られる。ここでは、明らかに社会的差別用語として使われている。つまり、ほぼ「我々の社会の荷やっかい」という被差別的な社会存在へ向けた表現として、当該社会の通常の評価だったに違いない語句として使われている。アキレウスが自分で自分のことを *ἄχθος ἀρούρης* でこれまでであったと言うのは、転用的用法であって、転用・常用という基準からすれば、両者の位置関係についてこれとは逆の判断をすることは困難である。

ス自身を手厳しく批判している表現として、Verse-end Formula かもしれない名詞句を転用して使われた「特別な」表現である可能性が高い。つまり「英雄」としての自分自身に対する自己同定と、その自己同定の核心である義務（アキレウスはこの言葉を使っていないがもし使えば *τοῦμόν μέρος*) を果たせなかった自己への、内なる自己による批判の言葉を *ἄχθος ἀρούρης* が意味している可能性は高い。この詩句を、ソクラテースは自分の裁判で引用したのだ。

しかも、この句を、ソクラテースが、これまでも何度も脱獄・亡命を勧めに来たに違いないクリトーンに、その勧めを拒絶する理由として使った可能性は高い、と私は見ている。44e1-45a4 を中心に、私などのような常識人には過激すぎるクリトーンの発言がある。*συκοφάνται* など恐れるに足りない。我々友人たちは、全財産を失う覚悟が出来ていると。これが狂気による発言でないとしたら、クリトーンは、アテーナイは、死刑が確定した「犯罪者」の脱獄・亡命には、何らかの確信があつて、寛容とみているのか、あるいは所詮、現在の政府はそう長くはないと判断しているのではないかと私は疑ってみたこともある。しかしむしろ、この過激に聞こえるクリトーンの発言の一番確実にみえる理由はこうではないか。ソクラテースが生きてこの世に存在しつづけることは、友人その他にとって、場合によれば生死に関わるような危険を及ぼす可能性がある (*ἄχθος ἀρούρης*)。だから、クリトーンの脱獄・亡命の勧めには応じることはできない、と拒否して来たのではないか。そして、そのソクラテースの説得には一定の力があつた。だからこそ、今説明した「過激な」説得がなされ、あまつさえその説得は *ἀλλ' ἐμοὶ πείθου καὶ μὴ ἄλλως ποίει* [いいかい。僕の説得に従うんだ。違背は許さないからね。45a4] というのはなほだ非紳士的な、頭ごなしの命令で結ばれるのだ、と。この言葉の口調は、ソクラテースを説得することへの絶望を既にクリトーンが抱いていたことを示していると解すべきだろう。

何故に II. 18. 98-126 のアキレウス演説が、最深のアイドース発言であると発表者が評価しているのか、その理由を語った。社会を共有する同僚たる他者への配慮が行動者に対してある抑止力として働くのがアイドースであるとすれば、社会を共有する他者への配慮が成立しえない状況で、ある主体に、社会を共有する同僚なしで、自家中毒的に、ある行動に対する抑止力が、あるいは批判力が働くのは、そういうメカニズムの極端なケースだと私は考えるからである。別の単純な言い方をすれば、『イーリアス』でのアキレウスは、そのひとの存在にアイドースを感じる事ができる社会的同僚、その人たちからのネメシスをいつも配慮しながら行動している社会的同僚を、既に失ってしまっている、そういう状況に置かれてしまっている、とも言えなくはない。もちろん、『クリトーン』のソクラテースも、作品の作り手はそのようなものとして表現しているとしか言いようがない。

もちろん、ソクラテースはアイドースという用語を使わない。この語がすでに日常語としては使われなくなった死語に近い語だったからであろう。アイドースは明らかに英雄叙事詩を支えた時代、つまり原理としては部族社会、の終焉とともに、使用されなく

なった、ということであろう。しかし、ソークラテースはそれに類似した意味を持つ表現を必要とし、τὸ δαιμόνιον が、その役割を果たした、と私は見ている。その τὸ δαιμόνιον 使用が、彼に死刑をもたらす訴因のひとつとなった。

以上、ソークラテースの夢の中に現れた、白い衣を纏って、死刑実施の日を予告した美しい一人の女性が、アイドースであると、この論者が確信している理由を語った。